写真：2023 年 7 月初旬、夏空の下に咲くキキョウ

武庫川臨床教育学会　ニュースレター

2023.7.27　No.20

私にとっての、臨床教育学における「ナラティブ」（小さな学習会③：上田講演より）

上田前会長は大きく４つの柱にそって話されました。第1は成育史とナラティブ、第2は「聴くこと」の重さについて、第3は東日本大震災被災地のAさんの声を聴く、第4は同じくBさんの声を聴くという構成でした（後日、大会などで詳細が報告される予定です）。

成育史におけるナラティブ

はじめに小さいころ、戦争の話（中国戦線＝兵隊哀史と中国での生活、虐殺…）を聞かされていたが「面白い話」として聞いていた事、大学で広島山村の「過疎化」の物語を聞いて考えた事、カナダで、クランディニンの実践研究からナラティブの対立と協調を学んだ事、東日本大震災被災地の人々の声を聴く中で考えたエピソードを語られました。自分が聞かせてもらっているのに「聞いていただいて感謝します」という人々の言葉が印象に残っていると強調されました。

「聴くこと」の重さにたえられるか

聴くことと簡単にいうが、聴くという本質は何だろうか。２つ目の問いです。医師の自殺率は一般人の２倍、精神科医は５倍と高いそうです。様々な患者からその感情に巻き込まれ、つらい体験に自分を重ねて、相手の人生に本気で同化してしまう。上田前会長は現在中学校の現場で社会の授業を担当されているそうですが、中学生が教師に向かい「殺したろか」とすごんできたらどう対応したらいいのか考えるというエピソードを紹介されました。そこで威圧的に対処するのか、笑って対応するのかという問いです。語り手の自由と聴き手の不自由のギャップの中に聴くという行為が成立する。「重たさ」を回避するために、カウンセリングの専門家は「クライエントと視線をあわさないように」するというが、自分は視線からのがれることはできないという実体験も語られました。

生存罪責感情からの当事者の意識

石巻氏在住の元高校教師Aさんは、被災当時のインタビューに対して、次のように答えられた。

「周りで聞く話というのは、家が全焼した、流された、誰が亡くなった、そういうのが普通に周りにあるわけです。そういうなかで、はじめの頃は犬の散歩ができないですよ。変な話だけども、犬を散歩させるなんて姿は、これ見せられないし…。電

武庫川臨床教育学会
http://mukogawarinkyo.com/
〒663-8558
兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学教育研究所内
電話番号:075-922-7749（吉益自宅）
メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

気がついても、外の電気はつけないようにするとか、気を遣うようになって…。家を流された人たちが「ここの家が残りやがって」というような声が聞こえてくる気がした。…自分は何もそういう目に遭っていないけれども、何をしたらいいのかという葛藤がずっとあったんですね」

Aさんは、過酷な被災体験を、被災者が語るに思い事実を代弁し、社会に提示していく被災者の「証言者」「同盟者」「代弁者」としてあることの一面と、それでも、Aさん自身は家族も家屋も被災してはいないという負い目の感情、すなわち「生存罪責感情」との「葛藤」を語っている。こうしたAさんの語りから、ナラティブ的対応として、当事者の「証言者」「同盟者」「代弁者」になる。当事者のナラティブの背景にある「生活世界」と私の世界との「違い」に気づく。「生存者罪責感情」と当事者への敬意（リスペクト）が大事と結ばれました。

「聴く」という行為と自己成長

Bさんは福島県郡山市でひきこもりの若者支援、震災後は放射能汚染からの一時避難・一時保護に取り組んできた。Bさんの生い立ちと、人生の中の種々のエピソードを援助の精神と応答させて捉えることで「自己内化」がはかられたとして報告された。「内化」「外化」という概念についてヘーゲル哲学の説明もされました。紙面の関係で詳細な報告はできませんが、討論交流の中で、紹介された中学生の「情動的」なことばをどのように受け止めるのか、聴くのか、中学生の発言の意味をどう考えるのかが、参加者の体験もふまえて発言されたことが印象に残りました。上田前会長の地道な調査活動と関連した具体的なご報告で大変示唆的で、学ぶことが多かった学習会でした。

小さな学習会④のご案内

9月2日（土）14 時～16 時（予定）※ オンライン開催

大正期のパンデミック時の人々の暮らしからコロナ禍の今を考える（仮題）

吉岡 眞知子（東大阪大学）

6 月の上田前会長の問題提起に続いての第 4 弾です。コロナ禍で私たちの日常生活は大きく変化しました。マスクの生活が当たり前になりました。コロナ感染症は 5 類感染症に移行され、マスク着用も本人にまかされるようになりましたが、また感染者の数が増えてきました。こうした中で感染症の歴史に学び、今をどう生きるかを考えることが重要です。吉岡眞知子理事の研究の成果を縦横に語っていただく予定です。

◆ 参加希望の方は事務局までメールでお知らせください。URL をお送りします。

メールアドレスはこちら mukogawarinkyo@yahoo.co.jp （8/28 締め切り）

9/9(土)相愛大学フィールドワーク

昨年の花園大学フィールドワークに続いて、今回は石本日和子会員、北川健次会員が勤務されている大阪の相愛大学を訪問することになりました。石本さん、北川さん、便宜をはかっていただきありがとうございます。内容としては、相愛大学の教員養成の状況、学生の様子などについて問題提起をしていただき、参加者で交流する予定です。

【日時】 9 月 9 日（土） 9 時 45 分に相愛大学正門前集合（予定）

【場所】 相愛大学（大阪市住之江区南港中 4-4-1）ポートタウン東駅から徒歩 5 分

【内容】 10 時～11 時：問題提起（石本会員、北川会員から）

11 時～12 時：意見交流

◆ 参加希望の方は事務局までメールでお知らせください。

メールアドレスはこちら mukogawarinkyo@yahoo.co.jp （8/28 締め切り）

シリーズ：私と臨床教育学⑰

悶々と毎日が続く中で

北川 健次（大学教員）

私が臨床教育学を学ぼうと思ったのは、あと 10 年ほどある教員生活という時期に全校単級の小規模校に転勤となり、その 1 年目で教育実践上の危機を感じたときだった。

新転任者紹介で歌を歌ってウケたなと思って教室に行く。最初はずいぶんガチャガチャしたクラスだなと思っていたが、担任が替わり最初だから仕方ないのであって、だんだん落ち着くだろうと高をくくっていた。しかし、一向に落ち着く気配がなくズルズルと時が過ぎていった。ボス支配があった。女子の対立があった。いじめがあった。おしゃべり、手遊び等で授業が成り立たない。ちょっとしたことで泣き出して塞ぎ込んでしまう子やすぐふて腐れて逃げ出してしまう子などがいた。不登校気味で貧困家庭の子がいた。場面緘黙気味の子がいた。授業をすると例えば、体育で鉄棒をしようとしても逃げていく。リレーをすればバトンを投げてパスをする。その他にも・・・。それなりに教育実践の積み上げもあり、何とか切り抜けていけるだろうと思っていたのだが、取り組もうと思ったことがことごとく外れてしまう。こんなはずじゃなかったのにと悶々とする毎日が続いていた。

ゴールデンウィークまでに心身ともに疲れ果てて、五月病ではないが、朝、出勤するのが億劫になってきた。管理職や教務主任などに助けてもらうのだが、「ベテランのわりに出来ないやつ」とのレッテルを貼られた感じが管理職の口ぶりからうかがえたし、ベテランという自負が逆に自分を追い詰めた感があったとも思う。学年の滑り出しはまったくしんどく、この状態がいつまで続くのか、打開策を見つけられないまま時が過ぎた。ずっと、朝早く目覚める日が続く。よく動悸がする。頭が何となくぼーっとする。なぜか寝汗でじとっとする。不安感がつのる・・・。

その日（6 月 10 日木曜日）、とにかく朝、腰が上がらなかった。ところが、休みたいと学校へ電話をするのだが、その自習計画を伝えると、「それが出来たら何をするのか、作文は担任の思いがあるだろうから出来ない」などと追及される。休むのも無理なのかと思わされた。それでも何とか休んでみることにした。その次の日も行けず、心療内科を受診した。診療まで時間があったので、映画を見た。なぜか後ろめたさを感じてしまう自分がいた。診察を受けた。最低でも 1 か月ほどの休養をするよう言われるかと思いきや、「適応障害」と書かれた診断書を渡されただけだった。学校長はそれを受け取り何か配慮をしてくれるかと思いきや、何もなかった。結局、学年末まで毎日重い気持ちで過ごし、一年間をなんとか乗り切ることができたのだが、とにかく休まず教室に行くことこそが教育実践だとしか思えない毎日であった。きっと少なくない教師が，日々の悩みに絶えながら、こんな思いを抱いて毎日を過ごしているのではないかと思い至った。

私は、その前年に特別支援学級を担任し、日々の子どもの記録をつけていた。そのことを思い出し、この辛くて苦しい毎日を書き残しておこうとした。子どもとの出来事を綴った。子どもの悪口のような書きぶりだが、だんだんと客観的な目で見た内容も書けるようになった。すると、ちょっとした子どもの言動に心を向けることが出来た。そういえば子どもに拒否される，避けられているわけではないと、少しは思えるようになった。それでもすべてが解決、改善したわけでもなく、満身創痍の状態が最後まで続いた。いちばんの悩みは、自分の不甲斐なさ、子どもが分からない、実践の糸口がつかめないと言うことだったと思う。日々綴ったこの記録は、『学級日誌』として残してある。

子どもが分からないという問題を解決することが、後の 2 つの悩みの解消につながるのではないかと思った。その当時、田中孝彦先生が武庫川女子大学に来ておられたので、ここで学べば、残りの約 10 年を教師として生きる力が得られるのではないかと思った。臨床教育学を一から学んでいない。しかし、修士課程で学ぶには、履修の関係で通うことが出来ない。そこで、すでに滋賀大学で修士を取得していたので、思いきって博士課程を受験することにした。そう思い立ち、大学院の田中研究室を訪問したのが、その年の 10 月 27 日だった。田中先生とともに上田孝俊先生も同席されていた。何を話したかは記録されていないが、翌日の日記に「昨日は田中先生とはなしててよかったなあと思ったのだが、やはり現実はしんどい」と記してあった。とにかく、この訪問で大学院の門を叩くことになったのだ。年が明けて、1 月 11 日に田中研究室へ行く。「研究計画の打ち合わせ。小学校教師の専門性と問われると回答に窮した」と書いている。受験に向けての相談があったようだ。そして、2 月の試験を終えて、4 月から田中ゼミで学ぶこととなった。

いざ入学して、何を研究するかがなかなか決まらなかった。博士課程は、本来ならばテーマも担当教官も決めて入学するものなのだと思うが、「小学校教師の専門性」といったテーマが大きく、具体的な内容が見えなかった。結局、自己の教育実践の要としていた「生活綴方」でいくことにした。しかし、ここでもまた悩み、高知へ行って「小砂丘忠義」の資料を集めたが何かしっくりこず、生活綴方の源流ともなった芦田恵之助の「随意選題思想」へと舵を切って、論文を仕上げることになった。しかし、5 年で書き上げることは出来ず、もう一年研究生で残ってぎりぎり書き上げることが出来た。

6 年もの期間、担任や教務主任をしながら大学院へ通った経験は貴重な時間となった。大学院での学びの経験を生かし、もう一度あのクラスを受け持ったとしたらうまくいっただろうか。それは分からないが、現場での実践にすぐ役立つものではないとしても、自己の人格形成のうえで何かしらの影響を与えたことは確かだと思うし、それが教育実践の中ににじみ出ているのだろうと思いたい。

定年を過ぎ、2 年間の再任用、そして大学に籍を置くこととなった。肩書きが小学校教諭から大学教員へと変わった。自己の教職経験と学びの成果を、教師に成り行く青年たちに伝えていこうと思っている。

※次回　ニュースレター執筆予定は加藤恵美子会員です。

事務局からのお願いとお知らせ

会費納入のお願い

今年度の年会費を別紙にてお送りしています。ご確認いただき、ご入金をよろしくお願いします。

収支決算報告書を同封します

会計監査を終えましたので、収支決算報告書を同封いたします。ご確認よろしくお願いします。

臨床教育研究懇談会のお知らせ

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科が主催する「臨床教育研究懇談会」について、今後は武庫川臨床教育学会との共催で開催することになりました。安東由則研究科長、中尾賀要子先生のご尽力で計画中です。詳細は後日お知らせします。

武庫川臨床教育学会 第 18 回研究大会

2024 年 3 月 9 日（土）武庫川女子大学教育研究所にて開催します。大会の詳細につきましては次回のニュースレターで紹介いたします。

編集後記

▶東畑開人『聞く技術　聴いてもらう技術』がよく売れている。示唆に富む書物でしたが、今回の上田前会長から提起は、単に技術という枠ではなく、思想、哲学としての問いが、聞く・聴くとい行為の中にある、そこから学ぶ事の意味についてあるのではないかと考えさせられました。▶北川会員は苦しかった当時の様子をリアルに書いてくださいました。その当時、いつも明るい北川さんが苦悩にみちた顔をされていたのを今でも鮮明に覚えています。▶次回の小さな研究会でみなさんとの新たな出会いを楽しみにしております。＜文責：吉益＞